# ５年後の石川さん追悼

写真は昨年 8 月刊行の『追悼文集　石川洋明先生』の表紙。石川洋明さんが 2014 年 6 月 30 日に亡くなり、5 年の月日が流れた。私が名古屋市立大学を退職した日から 3 ヶ月後のことだった。

石川さんの死は、とりわけ退職前後の私にとっても忘れられない。6 月 30 日が来ると、いつも石川さんを思い出す。こうしてレポートを毎朝書くようになったのも、石川さんが亡くなって 1 ヶ月後からだ。追悼文集に寄稿した、2015 年 6 月 30 日に書いた拙文の最後から。

卒業式を終え、いよいよ私の退職の日を迎えた。辞令をもらってから、教職員の皆さんにお礼のメールを出した。すると彼からすぐに返信が届いた。私が退職後はゆっくり仕事をしていきたいと書いたのに対し、「私も、やり残した仕事を進めていこうという立場ですが、スローペースが許されるかどうかは神のみぞ知る、です」。そして「くれぐれもお体にはお気をつけておすごしください（病気は私だけで十分です）」とあった。彼のお通夜と葬儀の席で、このメールのコピーを何度も読み返した。

こうしてレポートを読みながら、「追悼文」を書いていると、思い出に残ること、思い出すことが次々と浮かんでくる。あと 2 点だけ書いておきたい。

一つは中日新聞の連載記事である。大きな反響があり、賛否両輪の「評価」もあったようだ。記事を書いた安藤明夫編集委員と、石川さんのことを何回か話したことがある。「問題認識特講」の非常勤講師を依頼しに中日新聞社に行ってからだ。安藤さんは NPO の関係で、石川さんを前から知っていたという。安藤さんは 203 教室で金曜の 1 限に講義をした。2 限には石川さんが同じ教室で「最後の」講義をした。これもなにかの縁であろうか。あの記事については厳しい声も聞いており、「責任」を感じたりもした。でも「石川先生が言いたかったこと、書きたかったことが書かれている」という声を聞いたこともある。

もう一つは、石川さんの遺稿「私の障害学」である。これもレポートに書いたが、彼らしい辛口で「障害をもった経験」を社会学者の目線で綴っている。これを読んで、私の最終講義に彼が車椅子で来てくれて、さっと 201 教室の中ほどまで上がり、講義を聴いていた姿を想い起す。あの時、教室の最前列に人工呼吸器をつけ、普通学級に通う小学 2 年の林京香ちゃん一家も来てくれていた。退職後も京香ちゃんから、「元気」をもらっている。「遺稿」に書かれていた障害者支援に向けた、社会学者らしい「意向」が参考になる。ここでも彼に感謝したい。

（2019 年 6 月 30 日）